

逆にカラハリ砂漠に住むコイサノイドに属するピグミー族とコイ族とを比較すれば、人種形質としては両者極めて近縁であるにもかかわらず、コイ族の主として女子のばあい、脂腎 (steatopygia) とよばれる巨大な臀部を特徴としている。脂腎は四季の特定の時期に強制的に多量の食料を摂取すると大きくなり、その他の時期には小さくなるという観察もあるといわれているが、彼らの社会において臀部が大きいことが美的であるという観念があることもしばしば指摘されていることから、これについても上述した美的観念との相関関係の存在が疑われる。

このような象徴的、美的その他の価値観といった、観念的なものの身体に及ぼす影響については、その有無をも含めて、今後研究する必要があるだろう。

『類型学序説 — ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』1995年10月31日初版第一刷。

類型学序説

まえがき

はじめてロシア語を学びはじめたとき、ロシア語がそれまで学んできた英語などと非常に異なった「くせ」をもっていることに、とまどいを感じたことを、覚えている。たとえば英語であれほど自由にまた便利に用いられていた have 動詞がほとんど用いられないで、be 動詞にあたるものがその代わりをしていることや、名詞に「もの」であるか、それ以外のものであるかという区別があることなども、その一つであった。そのうちに、その中にはたとえば所有の表現とか、「～が好きだ」という表現のように、日本語と共通する「くせ」や、be afraid とか full とかのように、英語でも属格をとる語彙がよく似た意味をもっているというように、英語と共通する「くせ」があることもなんとなくわかってきた。しかしこれらはあくまで「くせ」であるから、なぜそのような現象が起こるのかを問うことは不可能でもあるし、また意味のないことであると思われた。

しかし最近とくにクリモフによって提唱された内容的類型学によれば、これらの「くせ」が実は言語の類型と深いかわりをもっていること、そしてそれらが構造的に意味をもっていることが、主張されているように思われる。この立場からすれば、これまで説明不可能と思われ、言語のさまざまな箇所に散在していたいろいろな現象が、たがいに関連をもったものとして立ち現れてくる。この内容的類型学の方向は、旧ソヴェト、とくにレニングラードを中心とする言語研究の、かなり長年月にわたる歴史を、背景にしていると思われるが、少なくとも我々にとっては、そのようなものとして意識されるようになってからまだ日も浅いため、まだまだ不十分な点やよくわからないことも多く、またさまざまな分野からの批判の存在も考えられるが、それにもかかわらず、一つの新しい視点を言語の研究に提供するという点で、その今後について注目する必要があると思われる。とくに最近イヴァーノフとガムクレリゼによって類型学の成果を比較言語学に体系的に適用しようとする試みが現れたことも、その必要を強く感じさせる。

ここで述べようとするのも、内容的類型学の出現の経緯をおおまかに跡づけ、その内容を主としてクリモフの所説について概観して、そのものの観方をもとにしてロシア語の諸現象を考察すれば、どのようなことがいえそうであるかを考えてみようとするのを、その趣旨としている。また内容的類型学が生じてくる過程で、従来の表現の技法を取り扱う類型学が、形式的類型学として精密化しつつある過程を、主としてレヴジンの所説をもとに瞥見した。したがって本書は著者自身の今後の研究の一つの足がかりとするために、問題を整理したものであり、その意味でとくに独創性を主張するものではない。しかし従来類型学という名ものに行われてきた研究で、内容的類型学以前の段階にとどまっているものが多いことを考えれば、このような整理もなにかの意義をもちうるのではないかと、ひそかに考えている。

本書の第四部として、いま述べたガムクレリゼ・イヴァーノフの手による、印欧語比較文法への応用についても、若干触れることにした。この分野においても、旧ソヴェトの研究にはそれなりの歴史があると思われるからである。

本書は1984年に大阪外国語大学における集中講義のノートに手を入れたもの

であるが、はからずもこのたび京都大学学術出版会によって出版の機会を与えられた。まことに有難いことである。貴重な文献について教示戴いたり、また貸与下さった、出版会および周囲の方々、関係者の各位、並びに直接折衝にあたられた八木俊樹氏に感謝申し上げる。

一九九三年三月二十日

『デュナミス』創刊号 1997年5月1日。

デュナミス 発刊の辞

このたび我が文化環境言語基礎論講座で、論集というほどのものではないにしても、それぞれが論文を書くよすがともなればとの想いで、小冊子を出すことにした。出すからには名前がなければならぬ。皆で苦吟したがなかなか決まらぬ。結果『デュナミス』とすることになった。デュナミスとは、言うところの「潜勢」であり、エネルゲイアを生み出す底のものである。これはただエネルゲイアに先立つというものではない。それは力である。既にしてそこには神気が動いている。たとえばはじめは幽かな揺らぎであっても、揺曳する神気がおのずから凝り、やがては「顕勢」となって奔出するであろう。少なくともそのような期待を抱いて発刊の辞としたい。終わりに、ウェルギリウスのひそみになって一言。

Labor omnia vicit / Improbis (Georgica 1, 145-146)

山口 巖
洛東研究室にて
1997年3月